

本書の使用法について

＊問題は第Ⅰ部・第Ⅱ部・第Ⅲ部で構成されている。

第Ⅰ部は、漢文の基本句形を確認するためのドリル問題である。

第Ⅱ部・第Ⅲ部は、実践的な演習問題である。易しい問題から徐々に難しい問題になるように配慮して配列している。

第Ⅲ部には、大学入学共通テストを意識した、より実践的な予想問題を並べている。

＊まず、解答時間を設定し、その時間内で解くように努力しよう。慣れない人は、最初は20分～30分程度かけてもよいだろう。慣れてきたら20分以内で解くようにしてみるとよい。

＊問題を解き終えた後、解答・配点を確認するだけで終わってはいけない。間違えた設問については必ず【設問解説】をよく読んで、解き方を確認しておくこと。同じタイプの問題を見たときに、同じ誤りを犯さないようにするためである。

＊問題を解いたときに、読み方・意味・解釈がわからなかった箇所は、【書き下し文】・【全文解釈】を見て確認すること。また、基本句形については、【解釈のポイント】の説明にも目を通して覚えることが必要である。

＊最後に、必ずしてもらいたいことがある。それは、本文の音読である。問題を解き終え、解説を確認した後、必ず本文を二度三度と声を出して読んでもらいたいのである。遠回りのように思えるかもしれないが、音読は漢文に慣れるための最善の道である。

解答の着眼点

入試漢文では、例年多種多様な問いが設けられている。その中で、書き下し文（句や文の読み）の問題、解釈問題、説明問題の三つが定番と言えるものである。そこで、これらの設問への着眼点をまとめておこう。

＊書き下し文の問題（句形の知識が基本。）

- (1) 句形や文型の読み方に着目する。——明らかに句形や文型の読み方から外れるものは除外する。
- (2) 残った選択肢は訳してみる。——誤った読み方は、意味の上でも誤りとなる。

＊解釈問題（まずは逐語訳から。文脈に頼りすぎないこと。）

- (1) 句形や語句の意味を押さえる。——一字の漢字は熟語にして意味を考えるのがよい。
- (2) 送り仮名にも注意する。——格助詞「ヲ・ニ・ト」や接続助詞「バ・モ」などの用法に注意。

※訓読に従って、一語一語の意味を現代語訳に置き換えることが大切。

＊説明問題（解答の根拠を探す。）

- (1) 傍線部を正確に訳してみる。——省略されている主語や目的語が把握できれば、正解はあと一歩。
- (2) 設問の内容（比喩の説明・心情の説明・理由の説明など）を念頭において、解答の根拠となる箇所を探してみる。——登場人物の心情や、その行為の理由などを考える場合は、発言に注目する。

目次

I部 基本句形確認編	問題編	10	(解答: 30)
------------	-----	----	----------

II部 演習編・基礎		問題編	解答・解説編
第1問	『呂氏春秋』	32	1
第2問	『小学』	36	4
第3問	『莊子』	42	8
第4問	『夢溪筆談』	48	13
第5問	『史記』	52	17
第6問	『孟子』	58	21
第7問	『玉泉子』	64	25

第8問	『唐詩選』・『芸圃擷余』	70	30
第9問	『匡正錄』	76	35
第10問	『韓非子』	82	40
第11問	『閱微草堂筆記』	88	45

III部 演習編・完成			
第12問	『皇朝史略』・『白氏文集』	96	51
第13問	『東軒筆錄』	104	57
第14問	『尚綱齋集』	110	62
第15問	『三夢記』	116	67
第16問	『先哲叢談』	122	71
第17問	『詠史詩註』・『詠史詩』	128	77
第18問	『続世説』・『聞見近録』	136	82

子路問事君。

〔論語〕

※子路―人名。孔子の弟子。

現代語訳

子路は主君に仕えることについて（孔子に）尋ねた。

問 「子路問事君」の返り点と書き下し文との組合せとして最も適当

なものを選び。

- ① 子路問_レ事_レ君 子路君に事_{つか}ふるを問ふ
- ② 子路問_レ事_レ君 子路事ふる君に問ふ
- ③ 子路問_レ事_レ君 子路事ふるを君に問ふ
- ④ 子路問_レ事_レ君 子路君を事_{こと}とするを問ふ
- ⑤ 子路問_レ事_レ君 子路事とするを君に問ふ

【解説】

漢文の構造に着目しよう。
漢文には次のような構造がある。

漢文の構造

- 1 主語＋述語
- 2 主語＋述語＋目的語
- 3 修飾語＋被修飾語

目的語には「ヲ」「ニ」「ト」「ヨリ」などの送り仮名を補い、上の述語に返って読む。

問題文の構造は次の通りである。

主語 述語 目的語
子路 問_レ 事_レ 君

述語「問」の目的語「事_レ君」は、さらに述語「事」＋目的語「君」の構造になっている。

【語句】

○事_{つか}…仕える。

「こととす」と読む時は「専念する」の意味。

孔子学鼓琴於師襄子。

〔韓詩外伝〕

※師襄子―人名。

現代語訳

孔子は琴を弾くことを師襄子から学んだ。

問 傍線部「学鼓琴於師襄子」の返り点と書き下し文との組合せとして最も適当なものを選び。

- ① 学_レ鼓_レ琴_ニ於_ニ師_レ襄_子 師襄子に琴を鼓するを学ぶ
- ② 学_ニ鼓_レ琴_ニ於_ニ師_レ襄_子 琴を鼓するを師襄子に学ぶ
- ③ 学_ニ鼓_レ琴_ニ於_ニ師_レ襄_子 琴を鼓するを師襄子に於いて学ぶ
- ④ 学_ニ鼓_レ琴_ニ於_ニ師_レ襄_子 琴を鼓するに於いて師襄子に学ぶ
- ⑤ 学_レ鼓_レ琴_ニ於_ニ師_レ襄_子 師襄子に於いて琴を鼓するを学ぶ

【解説】

「於」の用法に着目しよう。

「於」の用法

- 「於＋A＋述語」の場合
↓「Aに於いて」と読む
- 「述語＋於＋A」の場合
↓置き字として読まない

置き字「於」は前置詞の働きをして、対象・場所・時間・目的・起点・受身・比較などを表し、直後の語「A」に「ニ」「ヨリ（モ）」「ヲ」などの送り仮名を付けて読む。

なお、「于・乎」も「於」と同じ用法を持つ。

問題文の構造は次の通りである。

主語 述語 目的語 置き字
孔子 学_ニ 鼓_レ 琴_ニ 於_ニ 師_レ 襄_子

目的語「鼓_レ琴」は、さらに述語「鼓」＋目的語「琴」の構造になっている。

第1問

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名、および「」を省いたところがある。（配点 50）

高陽^{（注1）}応^{（注2）}將^{（注3）}為^{（注4）}二室^{（注5）}家^{（注6）}。匠^{（注7）}対^{（注8）}曰、「未^{（注9）}可^{（注10）}也。」木^{（注11）}尚^{（注12）}生^{（注13）}者^{（注14）}。」
 加^{（注15）}塗^{（注16）}其上^{（注17）}、必^{（注18）}將^{（注19）}撓^{（注20）}。以^{（注21）}生^{（注22）}為^{（注23）}室^{（注24）}、今^{（注25）}雖^{（注26）}善^{（注27）}、後^{（注28）}將^{（注29）}必^{（注30）}敗^{（注31）}。」高
 陽^{（注32）}応^{（注33）}曰、「縁^{（注34）}子^{（注35）}之言^{（注36）}則^{（注37）}室^{（注38）}不^{（注39）}敗^{（注40）}也。」木^{（注41）}益^{（注42）}枯^{（注43）}則^{（注44）}勁^{（注45）}塗^{（注46）}益^{（注47）}乾^{（注48）}
 則^{（注49）}輕^{（注50）}。以^{（注51）}二益^{（注52）}勁^{（注53）}任^{（注54）}二益^{（注55）}輕^{（注56）}則^{（注57）}不^{（注58）}敗^{（注59）}。匠^{（注60）}人^{（注61）}無^{（注62）}二辞^{（注63）}而^{（注64）}対^{（注65）}受^{（注66）}令^{（注67）}而^{（注68）}為^{（注69）}
 之^{（注70）}室^{（注71）}之^{（注72）}始^{（注73）}成^{（注74）}也。善^{（注75）}其^{（注76）}後^{（注77）}果^{（注78）}敗^{（注79）}。高陽^{（注80）}応^{（注81）}好^{（注82）}小^{（注83）}察^{（注84）}而^{（注85）}不^{（注86）}通^{（注87）}
 乎^{（注88）}大^{（注89）}理^{（注90）}也。

（『呂氏春秋』による）

（注） 1 高陽応——人名。

2 匠——大工。

3 撓——押されて曲がる。

4 勁——「強」と同じ。

問1

傍線部A「匠対曰」とあるが、「匠」の発言は①～⑥のうちのどこで終わるか。最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥

問2

傍線部B「未可也」の読み方として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

- ① 未だ可ならざるなり
 ② 未だ可ならざるか
 ③ 未だ可ならざらんや
 ④ 未だべからざるなり
 ⑤ 未だべからざらんや

第12問

次の【文章Ⅰ】はわが国の第八十代天皇高倉帝に関するエピソードを記したものの、【文章Ⅱ】は唐の都長安で官職に就いていた白居易が旧友の王十八に寄せたものである。【文章Ⅰ】と、【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、設問の都合で送り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 50点）

【文章Ⅰ】

初^メ帝^ノ幼^リ時、有^リ下^{ズル}楓^二樹^一者^上。帝^{メテ}極^シ愛^レ之^ヲ、命^{ジテ}（注1）藤^二原^一信^ニ成^一守^{ラシム}之^ヲ。一日、仕^{（注2）}丁^ヲ将^レ飲^レ酒、剪^{キリテ}枝^ヲ為^シ薪^ト、以^テ煖^レ酒^ヲ。信^ニ成^一見^テ而^{（注3）}大^{イニ}驚^キ、収^{（注3）}仕^ニ丁^ヲ将^ニ實^ニ之^ヲ罪^ヲ。会^{（注4）}帝^ニ使^ム信^ニ成^一上^ニ其^ノ樹^ヲ。信^ニ成^一具^{サニ}奏^シ其^ノ状^ヲ、叩^{シテ}頭^ヲ請^フ罪^ヲ。帝^{（注5）}從^リ容^ニ曰^{ハク}、「唐^ニ詩^ニ有^リ云^{ヘル}、『林^ニ間^ニ煖^{メテ}酒^ヲ焼^{クト}紅^ニ葉^一』誰^カ教^{ムルト}三^ニ仕^ニ丁^ヲ作^{ナサ}此^ノ風^ヲ流^ヲ。」無^シ復^タ所^レ問^フ。

（注）1 藤原信成―人名。歌人。

2 仕丁―宮中の雑役に従事する者。雑役夫。

3 収―捕える。

（青山延于『皇朝史略』による）

【文章Ⅱ】

送^リ王^ニ十^ハ八^ノ帰^ル山^ニ寄^ス題^ニ仙^ニ遊^一寺^ニ

友人の王十八が山に隠棲するのを見送り遙か仙遊寺に詩を寄せる

曾^{（注1）}於^テ太^ニ白^ニ峯^ニ前^ニ住^シ以前太白山のふもとに住み

数^{（注2）}到^{リテ}仙^ニ遊^ニ寺^ニ裏^ニ来^ル何度も仙遊寺を訪れた

黒^ニ水^ニ澄^ム時^ニ潭^ニ底^ニ出^デ黒い水が澄むと川底まで見え

白^ニ雲^ニ破^ル処^ニ洞^ニ門^ニ開^ク白い雲の切れ間から洞窟の門が現れた

林^ニ間^ニ煖^{メテ}酒^ヲ焼^キ紅^ニ葉^ニ林の中で紅葉を焼いて酒を温め

石^ニ上^ニ題^{シテ}詩^ヲ掃^{ハラフ} C 石の上で を払って詩を書いた

惆^{ちやう}悵^{さう}旧^{きう}遊^{ゆう}無^む復^{ふく}到^{たう}

菊^{きく}花^は時^{とき}節^{せつ}羨^{せん}君^{くん}廻^{かい}

（『白氏文集』による）

第 1 問

【解答】

設問	正解	配点
問 1	④	8
問 2	①	8
問 3	③	8
問 4	①	8
問 5	⑤	8
問 6	②	10

【出典】

『呂氏春秋』「似順論・別類」より採った。

秦の宰相、呂不韋が食客を集めて編集させた書。儒家・道家・法家など、春秋戦国時代の諸家の学説や説話を集めた百家全書とも呼ぶべき書であるが、反面内容に統一性がないという欠点がある。

【本文解説】

「餅は餅屋」ということわざがある。「物事にはそれぞれ専門家がいる」または「その道のことは、それぞれの専門の人が行うのがよい」という意味である。家を建てる場合には、やはりその道

の専門家である大工の意見を尊重すべきである。ところが高陽応は、木が生乾きなので家を建てるのは早すぎると大工に反対されたにもかかわらず、自分の浅薄な考えを主張して大工をやりこめ、家を建てさせてしまった。結果は火を見るより明らかであり、大工が予想した通り、家は結局崩壊してしまったのである。物事を台無しにすることがないよう、素人判断は慎しみたいものだ。

【書き下し文】

高陽応將に室家を為らんとす。匠対へて曰はく、「未だ可ならざるなり。木尚ほ生なる者なり。塗を其の上に加へば、必ず將に撓まんとす。生を以て室を為らば、今は善しと雖も、後將に必ず敗れんとす」と。高陽応曰はく、「子の言に縁らば則ち室敗れざらん。木益枯るれば則ち勁し。塗益乾けば則ち輕し。益勁きを以て益輕きに任ぜば、則ち敗れず」と。匠人辞して対ふべき無く、令を受けて之を為る。室の始めて成るや善し。其の後果たして敗れたり。高陽応は小察を好んで大理に通ぜざるなり。

【全文解釈】

高陽応が家を建てるようとした。大工が答えて言った、「まだいけません。木がまだ生乾きです。泥を木の上に塗ったら、木がきつと押されて曲がってしまうでしょう。生乾きの木で家を建てたら、今はよいとしても、後にはきつと家がこわれてしまうでしょう」

と。高陽応が言った、「あなたの言葉によれば、この家がこわれることなどはないであろう。木は乾けば乾くほど強くなる。泥は乾けば乾くほど軽くなる。強くなる一方の木の上に軽くなる一方の泥をのせたら、家はこわれない」と。大工は言い訳をして答えることができず、高陽応に言われた通りに家を建てた。家ができたが、つたばかりの時は立派だった。しかしその後、案の定(家は)こわれてしまった。高陽応はつまらない考えを好むだけで、大きな道理には通達していなかったのである。

【設問解説】

問1 会話部指摘の問題

「曰」以下は、高陽応が家を建てようとしたことに対して、木がまだ生乾きであるから時期尚早であると大工が反対意見を述べた部分である。この意見に対する高陽応の反論が「高陽応曰」以下に続くのであるから、**正解は④**。

問2 読み方の問題

ポイントは「可」と「也」の二つ。

まず「可」は「可能・許可・適当」などの意味を持つが、「可——」と下から返読する場合には「べし」と読み、下から返読しない場合は「可なり」と読む。選択肢は①・②・③に絞られる。
次に「也」は内容から読みを決定する。

②はこの部分の解釈からかけ離れている。高陽応はここで樂觀的な見解を述べているのだから、③も誤り。**正解は①**。

問5 内容説明の問題

傍線部をきちんと解釈すること、直後の内容に着目することが肝要である。

まず直後に着目すると、「受^ケ令^レ而^ル為^ス之^ヲ」とあるように、家を建てることに反対した大工も、高陽応の反論を聞いて、結局その指示通りに家を建てたわけであるから、①「仕事をやめて抗議する」、②「暴言に怒り、挨拶もせず帰ろうとする」はいずれも誤り。傍線部は、まだまったく仕事に着手していない段階なので、③「仕事をやり直そうとする」は不適当。

次に傍線部を、送り仮名「ベキ」にも注意しながら解釈すると、「ことわって返答することができず」となる。つまり大工は、高陽応の主張に納得したわけではないが、反論することができなかったために高陽応の指示に従ったのである。④「高陽応の考え方に共感して」は誤り。**正解は⑤**。

問6 趣旨の問題

本文を正しく読みとることができれば、難なく解ける問題である。

本文のあらすじは、次のようにまとめることができる。

①「ざるなり」は断定の意味の場合。
②「ざるか」(連体形+か)は疑問の意味の場合。
③「ざらんや」(未然形+んや)は反語の意味の場合。
ここは家を建てることに反対して「まだいけません」と断定している部分であるから、**正解は①**。

問3 返り点の問題

返り点の規則について整理しておく。

○一字下から返って読む場合は「レ」点
○二字以上返って読む場合は「一・二」点
○「一・二」点を間にはさんで返って読む場合は「上・下」点
「塗を其の上に加へば」は「上」から「加」へ三字返るので、「加」塗其上」となる。次に「必ず將に撓まんとす」は、「將」が再読文字で「將——」(いまにも——しようとする)と読むので、動詞「撓」から一字返ることになり、「將」の左下に「レ」が付く。**正解は③**。

問4 解釈の問題

前半は「子」の意味がポイント。
「子之言」とは「匠対 曰」以下で述べられている大工の意見を指すから、「子」は二人称「あなた」の意味。④の「子供」は誤り。後半は語意に即して解釈すればよい。「室不敗也」は「家はこわれないだろう」と解釈できる。

高陽応は家を建てようとした時に大工に反対されたが、浅はかな考えを主張して大工をやりこめ、家を建てさせた結果、家が完成したものの、結局その家は崩壊してしまった、と。選択肢中の「専門家」は本文中の「匠」と対応し、「素人」は「高陽応」と対応しているが、本文は、最後の「高陽応」以下のコメントからも明らかのように、「高陽応」が中心人物であるから、「高陽応」＝「素人」の行為とそれがもたらす結果とに焦点を絞った選択肢が正解である。専門家のあり方を中心的内容とする①・③・④・⑤はいずれも誤り。**正解は②**。

【解釈のポイント】

將^ニ為^{ラント}室^ヲ家^ニ……「將——」は再読文字。↓【設問解説】問3参照

未^デ可^{ナラ}也^ヲ……「未——」は再読文字。「まだ——しない」の意味。
雖^{ハレモ}善^{シト}……「雖——」は逆接の条件を示して「たとえ——であっても」(仮定条件)の意味の場合と、「——であるが」(確定条件)の意味の場合とがある。

【重要単語】

益^{ミツ}……ますます
果^{ハシ}……案の定・思った通り・本当に

亦^{また} Ⅱ（——）も）やはり・同様に
竟^{つひに}・卒^{つひに} Ⅱ 結局・とうとう
過 Ⅱ「すぐ」と読む場合は「通過する、度が過ぎる、まざる」
の意味。「あやまち」と読む場合は「間違い、失敗」
の意味。
↓【設問解説】問7参照

第12問

【解答】

設問	問1		正解	配点
	(イ)	(ア)		
問	2	4	5	5
問	3	2	6	6
問	4	1	7	7
問	5	1	5	5
問6		(i)	3	7
問	(ii)	3	5	7
	7	2	7	7

【出典】

【文章Ⅰ】

『皇朝史略』全十二卷。青山延子の撰。

青山延子は江戸時代後期の儒学者。水戸藩士として『大日本史』の編纂に携わった。『皇朝史略』は『大日本史』を初学者向けに編み直したもの。神武天皇から後小松天皇までを編年体で綴っている。本文は巻八から採った。

【文章Ⅱ】

『白氏文集』全七十一卷。

唐の白居易（字は樂天）の詩文集。わが国でも平安時代に伝わり広く愛読された。本文は唐の都長安で官職に就いていた白居易が旧友の王質夫（王十八）に寄せた七言律詩で、巻十四に収められている。

【本文解説】

【文章Ⅰ】

平安時代の高倉天皇の幼少時のエピソードである。帝はお気に入りの楓の木を藤原信成に管理させていたが、宮中の雑役夫が酒を温めるための薪としてその楓の枝を切ってしまった。自ら処罰して欲しいと願い出た信成に対して、高倉帝は即座に白居易の漢詩を引用して赦すという寛大で風雅な処置をしたのであった。

【文章Ⅱ】

唐の都長安で官職に就いていた白居易が、整屋県（数年前まで白居易が県尉を務めていた）に帰っていく旧友の王質夫に寄せた漢詩である。整屋県尉であった当初、白居易はこの地の仙遊寺で王質夫と親しく交わった。問6で言及されている唐の玄宗と楊貴妃を詠った「長恨歌」は、仙遊寺で語り合うなかで王質夫の勧めによって生み出された作品である。詩は、第一句から第六句にかけて当時の交遊を思い起こして懐かしみ、第七句・第八句では中央官として多忙を極める自分とは異なり、旧遊の地に帰るこ

とができる王質夫への羨望の念が綴られている。

【書き下し文】

【文章Ⅰ】

初め帝の幼時、楓樹を献ずる者有り。帝極めて之を愛し、藤原信成に命じて之を守らしむ。一日、仕丁將に酒を飲まんとし、枝を剪りて薪と為し、以て酒を煖む。信成見て大いに驚き、仕丁を収へて將に之を罪に眞かんとす。会、帝信成をして其の樹を上らしむ。信成具さに其の状を奏し、叩頭して罪を請ふ。帝從容として曰はく、「唐詩に云へる有り、『林間に酒を煖めて紅葉を焼く』と。誰か仕丁をして此の風流を作さしむる」と。復た問ふ所無し。

【文章Ⅱ】

王十八の山に帰るを送り仙遊寺に寄題す
曾て太白峯前に於て住し
黒水澄む時に潭底出で
林間に酒を煖めて紅葉を焼き
惆悵す旧遊復た到る無きを
数 仙遊寺裏に到りて来る
白雲破るる処に洞門開く
石上に詩を題して緑苔を掃ふ
菊花の時節君が廻るを羨む

【全文解釈】

【文章Ⅰ】

その昔（高倉）帝の幼少期、楓の木を献上した者がいた。帝はたいそうこれを気に入り、藤原信成に命じてこの木を管理させ

【設問解説】

問1 語の意味の問題。

- (ア)「具」は、動詞としてa「そなふ・そなはる」と読んで「そえる・そろっている」の意味、副詞としてb「つぶさに」と読んで「詳しく・すべて」という意味がある。ここでは直後の動詞「奏」を修飾していることと「具」の送り仮名から、bの副詞の用法であるとわかる。正解は②。
- (イ)「從容」は「ゆつたりと落ち着いたさま・くつろぐさま」を表す。ここでは「曰」を修飾する副詞として「從容として」と読み、「落ち着いて・くつろいで」という意味である。正解は③。

問2 語の読みの問題。

選択肢は(1)・(2)ともに副詞の読みが示されており、与えられた現代語訳から(1)は「以前」、(2)は「何度も」の意味であることがわかる。

- (1)「曾」は、副詞として「かつて」と読んで「以前ある時」の意味。②・④が正しい。同じく「かつて」と読む語には「嘗」がある。①・③「もとより」と読むのは「故」「素」「固」など、⑤「さきに」と読むのは「前」「向」などである。

- (2)「数」は、副詞として「しばしば」と読んで「たびたび・何度も」の意味。①・④が正しい。③「かさねて」と読むのは「重」など、②・⑤「しきりに」と読むのは「頻」などである。

た。ある日のこと、宮中の雑役夫が酒を飲もうとして、(この楓の)枝を切つて薪とし、酒を温めた。信成はこれを目にして非常に驚き、雑役夫を捕らえて処罰しようとした。ちょうどその時、帝は信成に楓の木を持つてくるように命じた。信成は事細かに事情を申し上げ、頭を地に付けて(拝礼して)自分を処罰して欲しいと願ひ出た。帝は落ち着いた様子で、「唐の詩に『林の中で紅葉を焼いて酒を温める』と言っている。誰が雑役夫にこの風流な行為をさせたのだろうか」と言った。(帝は)もう罪に問うことはなかった。

【文章Ⅱ】

友人の王十八が山に隠棲するのを見送り遙か仙遊寺に詩を寄せる

以前(私は)太白山のふもとに住み
何度も仙遊寺を訪れた
黒い水が澄むと川底まで見え
白い雲の切れ間から洞窟の門が現れた
林の中で紅葉を焼いて酒を温め
石の上で緑の苔を払って詩を書いた
以前(君と)交遊した地をもう訪れることができないのは残念で
菊の花咲く時節にかの地に帰ることができる君がうらやましい

ある。

したがって正解は④。

問3

返り点と書き下し文の問題。

基本句形と重要語に着目するとともに、文脈から傍線部の意味を推測することも大切である。

まずは傍線部の句形と重要語を確認する。「将」は再読文字として「將に——んとす」と読んで「——するつもりだ・いまにも——しようとする」と訳す用法のほか、動詞として「將ある(率いる)」と読み、名詞として「將」(將軍)と読み、接続詞として「將た」(そもそも・いったい)と読むなど多様な用法を持つ。選択肢のうち、②・④は再読文字として「將に——んとす」と読み、③は名詞として「將」と読んで「——べし」と読んでいるので誤り。「まさに——べし」と読むのは、「當」——「(＝)応」である。選択肢は②・③・④に絞られる。「之」は、a動詞「ゆく」、b格助詞「の」、c指示代名詞「これ」などの用法があり、cは直前の語が動詞の場合は目的語として「之を・之に」と読む。この場合も直前が「眞」という動詞であるから「之を」または「之に」と読む。選択肢のうち、①・③・④はa動詞として「之を」と読んでいる。②・⑤はc指示代名詞として「之を」と読んでいる。

以上を踏まえたうえで、残った選択肢の意味を検討しよう。